

紹介・柳田国男講述「消費論の革新」

編集・解説 堀越 芳昭

《解説》

ここで紹介する柳田国男講述「消費論の革新」(産業組合中央会東京支会『産業組合夏期大学講演集』昭和3年3月1日刊、所収)は、柳田国男研究においてこれまで紹介されてこなかった論稿である。『定本柳田国男集』(筑摩書房)、藤井隆至編『柳田国男農政論集』(法政大学出版局、1975年)、『柳田国男全集』(筑摩書房)にも収録されていない。また柳田国男の書誌や年譜においても記述がない。全44ページ、2万5千字におよぶ同論稿は柳田国男の昭和初期の消費思想・消費組合思想をみる上で貴重なものと思われる。

柳田は本稿で「私の御話しやうと思ひました所は、……消費組合の問題であつたのであります……私達の關係して居た時代が特に此點に問題があつた爲でありますか、今以て自分の一番考へさせられて居るのは消費組合とその社會的效果といふことであります。」と述べ、この講述の中心課題が当代の消費組合にあることを明らかにしている。数少ない柳田の消費組合論の論稿として重要であろう。

しかし柳田国男の消費思想・消費組合論は本論稿の昭和初期に形成されたものではない。その始源は、明治30年代・40年代における柳田国男の産業組合論にあったことに留意しておかなければならない。

柳田国男の初期の論文「商業人口に就いて」(大日本実業学会『実業時論』第1巻第1号、明治34年10月)では、「中間商人節減論」の

立場から、小生産者・消費者の不利益を防ぐ道は「小生産者小消費者の共同連合」、産業組合法による「販売組合購買組合」が最も有効であるとしていた。こうした購買組合論・消費組合論の基本的見地は、『最新産業組合通解』(大日本実業学会、明治35年12月)、『農業政策』(中央大学講義録、明治41年9月)、『時代と農政』(聚精堂、明治43年12月)、その後の『都市と農村』(昭和4年3月、朝日常識講座第6巻)、『明治大正史 世相編』(昭和6年1月、朝日新聞社)においても一貫していたのである。

本講述では、欧米諸国と比較して産業組合の日本の展開が論ぜられ、「産業組合」の名称の不適正なことが強調される。また柳田は「コーオペレーション」に触れ、産業組合の教育的効果を重視し、産業組合の使命・理想論を展開し、その上で消費論・消費組合論を論じている。柳田の初期の所論からの一貫性と昭和期における新しい問題の展開との両面を確認することができる。ここに柳田国男論・柳田国男協同組合論に新しい知見を加えることができるであろう。

なお本講述は章節区分や見出しがないので、編者の区分や小見出しを付記した。また原文に即して可能な限り旧字・旧仮名遣いを使用した。く、の字の繰り返し符号は使用しなかった。また段落や句読点など若干の補修をしている。原文が必要な場合次を参照されたい。

〔国立国会図書館 近代デジタルライブラリー〕
<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1027623>

消費論の革新

朝日新聞社顧問 柳 田 国 男

私は極古く産業組合中央會に關係して居つたと云ふだけでありまして、只今では殆ど組合の實際には携つて居りませんのでありますが、實は日本に於ては、産業組合には限りませんが、局外に居る理解者と云ふ者が非常に少い。殊に同情を以て外から事業を見て居ると云ふ人は殊に得難いのでありまして、内に居る人は非常に熱心、外の人は一向無頓着と云ふやうなことが多い。物に依つては營業の秘密とか何とか云つて、あやふやにして置く方が宜いのかも知れないけれども、産業組合の如き社會事業に付ては一番是が困るので、批評して呉れ、ばこそそれは世間の思ひ違ひである。又は斯う云ふ苦心もあるのだと云ふ風に話も出來ますし、又其批評の中には重ひ掛けない良い批評もあるので、こちらからも折合ひあちらからも折合つて、段々に効果を擧げて行くことが出来るのであります。内に居る人ばかり非常に苦勞して、外の者は知らずに居ると云ふのが非常に困るのであります。併しさう云ふことを言ひ乍ら矢張り私も門外漢の頓珍漢を考へて居るのかも知れないが、自分だけは是でも外部に居る人間としては理解もして居れば、同情も持つて居る者を以て任じて居るのであります。そこで御仲間同志の御考究とは少し趣を異にして聊か岡目八目の、御參考になると思はれることを御話したいと思ひます。

1. 産業組合の導入とその日本化

もう三十年程にもなりますが初めて此の日本に産業組合と云ふものが入つて參りました時

は、平田東助さん其他の先輩が内々氣遣つて居られましたことは、果して是が短い期間に十分に日本化することが出来るか、日本の産業組合と名付けることが出来るやうになるかどうかでありました。殊に報徳會側の人で以前から其趣旨でやつて居ります各地の團體はそれを感じて居つたのであります。折角こんなものを入れても、何時までも舶來品のやうな形で居るのではないか。十分に日本化することが十年や十五年の短い期間で出来るかどうかと云ふことが氣遣ひの因でありました。諸外國の例で見ると英吉利でも佛蘭西でも獨逸でも伊太利でも、さう云ふ國々は皆國際的に協力をしなければならぬ。迎も産業組合が各國だけで獨立して居つたんではいかぬから、國際的に協力しなければならぬと云ふ段になりますと、努めて外國と振合の似たやうな形のものに作つて、國に依つて差別のないやうに、法律や何か揃へて行かうと云ふ努力があつたにも拘らず、各根本に國風と云ふものがありまして、それが趣味や感情から出來たものではなくして、實際組合が其國に起つた時の歴史から出發して居るものでした。既に皆さん御聴きになつたかも知れませんが、例へば英吉利では労働者の苦闘から始つて居ります爲に、先づ消費組合の方に發達してそれから生産組合の方に力が入り、獨逸では農村で信用組合が先づ大に起りました。それは小農が行詰つてどうすることも出来なくなつて、其救済と云ふことから信用組合が何よりも大切になつたので他の國々でも多くは國情に應じてそれぞれの特徴を持つて居る。殊に大きな國の組合活動で

は、皆それぞれ自國の特徴に應じて仕事をして居る。さうして其様な歴史的特徴の少しもない國、即ち採長補短と云ふやうな國では、理窟許り盛んで實務の方が一向振はないのが普通である。獨り日本許りでない。歐羅巴でも例へば西班牙とかハンガリーとかいふ國では、隨分研究は進んで居けれども實際が中々活き活きとは行かない。今は知らぬがあの頃はまた實務の方が振はない。だから日本でも折角こんな面倒をして煩瑣な法律を作つても、それが何時までも附焼刃で終るのではないか。何年経つても模倣状態がつゞくのではないかと云ふやうなことを頻りに懸念して居つた。是はどうしても早く日本の組合、日本人の作つたものだと思ふやうな氣持を持てるやうにしなければならぬ。何時までも洋服と云ひ洋館と云つて、ペンキの家に住んで居るやうな氣持ちで、組合を作つて居るのでは仕様がなではないか。洋服洋館が今の生活に向くのなら、早くそれを日本服日本家屋にするがよい。向かないのなら少し試みてやめる方が宜い。斯う云ふ風に論じて居た人もあつたのであります。所が三十年後の今日になって回顧して見ますと、それは取越苦勞の最も無用なるものであつたと云ふことが出来るのであります。今日では誰が見たつても日本の組合は正しく日本化して了つた。私などは今になつてさう云ふことを言つたとて本當にせられないが、實は必ずしも日本化するか、しないかと云ふ點を心配はして居ませんでした、まさか今日のやうに盛んになることは出来得まいと思つた。なつたら仕合せだがなるまいと思つて居つた。多分は多くの保守派から、そんな單純な理論や感情で此の實際の世渡り問題が解決出来るものか、それは書生論だ、受賣り議論であると云ふ聲が踵いて廻つて、必ず産業組合の前途を邪魔することと思つて居つた。そして舊式の經濟の何れの方面からも頭を押へられ通してあつて、云はゞ是が役所の仕事である。主務官廳の

獎勵であるから町村は府縣に對し、府縣は中央政府に對しての御義理のやうなもので、棄て、置いては自分の面目が立たぬと云ふ小さな動機から、ほんの形だけの物を作るのではあるまいかと心配して居つたのであります。今になつてさう云ふことを言つても、私共の豫想が外れて居つた方だから縁起が悪いとも何とも言ふ人はないでしょうが、もともと組合が前時代の仕來りに對する反抗の精神であり、因習の流れに棹して居るのでない以上は、必ず強敵があるべき筈だ、惡戰苦闘は免れないであろうと感じて居つたのであります。所が此點も正しく自分達の豫測を裏切つたのであります。結構に裏切つたのでありますが、とにかく豫測して居つたよりは以上の成績が擧がつて居る。

◆産業組合の近年の発達◆

産業組合の近年の收穫は決して虚名ではなく實力である。成程到る所に古い舊式の經濟との間の利害の衝突、抵觸はありますけれども、その衝突の結果どうも困りますとて苦情を訴へて來る方、簡単な言葉で云へば被害者は組合ではない。組合側からは苦情は出て居ないで、寧ろ彼等に壓迫せられると稱する今迄の商賣人の側から苦情も出て來れば告げ口が出て來る。同じ新舊衝突とは云い乍ら恐るべき勁敵は却つて組合であつたのであります。世間の素人も恐らくは注意して居るだろうと思ひますが、第一には都市の信用組合などの意外なる生活力であります。最近の銀行破綻には色々の事情、數へ切れない個人的一般的理由はありますけれども、併し二流以下の銀行の弱り目、即ち預金の集中に齟齬したり、險しい金の運轉の仕方を無理にしたりした原動機と云ふものは、云はゞ此方面の競争に堪へられなかつたからで。實際此の都市信用組合の力と云ふものは、大都府許りでなく全國に亘り、二流三流四流の都會に於きましても頭を擡げつゝある。都會でなくとも地方に於ても非常に力を持つて居る。又共同購入に致

しましても、共同販賣に致しましても、同じことで、斯う組合が盛んでは堪らないと云つたやうな苦情、泣言を、もう餘程以前から我々は商人側から聞いて居つた。是を直ちに産業組合の日本化とも云へますまいが、少なくとも日本の組合の一つの特徴になつて居るのであります。

又全體に中央地方の官廳の世話が行届き過ぎる、余り産業組合許り世話せられては困ると居ふやうなことをも聞きますが、干渉して貰はない方が宜いと云ふ意見をそろそろ云ひ出す者もあり、もう政府の尻押しが引込められても困らないといふ動かすべからざる底力が出来て來たのであります。而もそれが何も特別の軍略、特別の兵法がある譯でも何でもありません。單に組合本來の精神と名付けて宜しい所の、小さいものを澤山集めた結合の力、例へば工場で言へば職工が賃銀の廉いのを力を合わせ多くしやうと云ふ組合思想組合原則と云ふものの力だけで斯うなつたのであります。つまり人が結合さへすれば斯うなると云ふことは、論理上は豫期せられて居つたが、實際の上に於ても小を集めて大を爲すと云ふ試みが、終に是だけの結果を生じたのだから、組合の制度から云へば成功と言つても宜い、勝利と言つても宜い、確かに一つの目出度い現象であります。

所がそんなに簡單なものならば、どこの國でも一樣にどしどし國一杯蔓延して行かなければならないけれども、事實はさうは行かない。是が或は産業組合制度の日本化と云ふものでないかと思ふのは、此點が日本だけで殊に目ざましく成功している居るのである。日本のみが相手をへこませた點で大成功をし勝利を占めている。私なんかゞ見ると、よい悪いは別にして是が日本の風であると思ふ。即ち此の點許りは日本で研究しなければ判らぬ。歐羅巴の國では産業組合の始まりましたのが三十年四十年も日本より古く、中には十九世紀の初め頃から始まつて居るのもありまして、歴史としてはずつと年

長者であるに拘らず、日本みたやうな目覺ましい而も手輕な成功を實はして居ない。露西亞みたやうに一切の小賣商人ならず、一切の仲賣商人を要せずと云ふ制度にして置いて、全國を組合化させると云ふのなら、恰も空地を置いて一つの草の種を播くのですから是は別であります。別にそんな細工をせず、自由市場に自由なる手足を以て角をとつて、こんなに競争者が無造作に敗けて、こつちが段々地歩を占めて行くと云ふことは、何か日本に限つた相手方の弱味と云ふものがあるか、若くはこちらの方に、強みがあるか、何だか知らないが是が我が國の特徴である。日本に限つて殊に顯著なる理由がなければならぬ。

◆經濟的弱者が經濟的強者か◆

私が今更物々しく之を指摘する迄もなく、恐らく今日お集りになつて居る諸君は、實務の豊富なる經驗からして既に其相違を、認めて居られるだろうと信じます。が試みに自分の考へ自分の解釋を簡單に申しますと、日本の初期の組合制度利用者と云ふものは、始から所謂經濟上の弱者ではなかつた。弱者とか強者とかは物さして量る譯に行かないから、見方に依つて色々意見の相違もあらうけれども、兎に角普通所謂經濟上の弱者ではなかつた。人が善くつて他人の言ひなり放題になつて居つて、今日まで自分の持つて居る地方を存分に見くびられ、外方の者から引廻されて居つたやうな人である。本當は底力を持つて居た。自分に生産力があつて自分で交換する。品物を抱へて居つて賣る買ふ金を作ると云ふのですから、ブローカーなども懷手をして何とか儲け口はないかと云ふ者とはわけが違ふ。明治時代に入つてから孤立觀ばかり強くなつて、而も人を見たら盜坊と思へと云ふやうな諺を知つて居り乍ら、實は甚だ善人で瞞かされ賺され引摺られてばかり居た所からして、何だか弱者みたやうな形になつて居つたが、實は相手方である所の金貸し、小賣人、仲次商

人と云ふ者が、最初に組合を作つた人々に對立しては本當の強者ぢやなかつた。強者弱者と云ふ者は云はゞ競争力の問題であるが、本當に確かな競争力を持つて居なかつた。あそこは俺の家の得意だ繩張りだなどゝ、御得意様を財産視して、今でも東京邊りでよく見るやうに、御用聞き同士が門の外で擲り合ひをやる。それは要するに御得意様なる者がよつほどの善人である。茲、即ち自分たちの經濟智識とお客の持つて居る智識との距離を利用して、今迄餘分の儲けをして居つたのが、小は米薪の御用聞きから、肥料前貸青田前買の連中迄に共通した馬鹿げた人工的競争であつた。だからほんの僅かな市場の研究、マーケットとはどう云ふものだ、販路とはどう云ふものだとか云ふ研究を、ほんの僅かでも御得意様方に知られたらおしまひである。金利はどう云ふ經路を辿つて高くなり安くなるかも知らず、何でもさうですかさうですかと云つて金を借りて居つた人が、一寸でも智識慾が出来て金利の問題を研究し、或は又市場の法則を研究しようと云ふことになる、それだけでも崩れて了ふやうな基礎を持つて仕事をして居つた。即ち相手方が實は最初からさう云ふ小さい弱者であつた。故に日本では産業組合は組合員に對する經濟教育として、どんな經濟の書物よりも有効でありました。假令取引に於いては何のお蔭を蒙らぬとしても、此經濟教育を組合の各員にしたこと、例へば購買組合ならばどこそこどうして買へば是だけで買へると云ふ實地教育、極く卑近な實地教育を與へた功績計りは、永い日本の經濟史に於て、殊に日本の平民の歴史に於て承認しなければならぬ所であります。

◆産業組合の大きな功績—實地教育◆

人に依るとそれはいらぬことだ。うつちやらかして置いても、小學校で是だけ教育し、中等學校以上で是だけ教育するのであるから、何も變則に産業組合なんかを以て教育しなくつても

段々判つて來ると云ふかも知れないけれども、少く共此組合と云ふものが之を實習さして呉れた此の經濟問題の實地研究をさして呉れたと云ふことは恩恵であつた。理事者には決つた人が任じあとの人たちは一向夢中で今日迄來たやうな場合でも、組合に入ると云ふことそれ自身が何故必要かと聞かれずには居ないから、ほんやりした智識ではあるけれども、此新知識は如何に有効であつたか判らない。

是だけの功績はたしかに認めなければならない。だからして其結果、日本の産業組合は頗る積極的なものになつた。積極的と云ふ言葉は色々の採りやうがありませうが、つまり人が進んでやらないでも宜い場合でも大に出て行つてやらうと云ふ特色を組合に附與したのであります。我々が困つて困つて困り抜いて、組合でも作るより外に自分の境遇から脱出する途がないので、最後の希望として産業組合を採用し、やつと一道の活路を見たと云ふやうな外國の貧民の歴史と較べて見ますと全く較べものにならない。即ち此點を日本風と認めて宜しいのであります。但し此が日本國人の才能が世界に冠たる結果である、日本人は斯う云ふ組合を組織する上に於て非凡なる天分を持つて居つた結果であると、之を自慢の材料としようとしたならば、氣の毒ではあるがそれは誤つて居ります。

◆産業組合以外の結合◆

斯う云ふ積極的の結合は本來誰でもすることです。誰でもすると云ふよりは若干の競争力を有し、其れから資本を有し、若くは自分たちだけにしか持てないと云ふ專賣權、例へば都會の周圍に居て野菜を作つて、誰が競争しやうと思つても競争出來ない、此邊の畠の作物を東京横濱に送るとか、此果物は此處だけにしか出來ないと云ふやうな長處即ち土地や地位を持ち、相手を押へるだけの競争力を持つて居る人ならば、棄てゝ置いても此結合はして呉れる。産業組合の宣傳を待たず共、惻巧なる人で競争力が

具はり、即ち經濟上の強者であればある程早くから此利益には氣が付く譯である。結合すればうまいことが出來ると云ふことに氣が付く筈である。實際又同業者の組合と云ふものは日本には幾らも出來て居りまして、此組合の中には組合をやつて呉れた爲に世間で困つて居る例もある。例へば最も困るのは書籍商の組合であります。日本全國を打つて一丸とし、書籍の小賣店がすつかり申し合せて、出版業者に向つても制裁を加へて、定價以外に賣つてはいかぬと云ふ聯合をやつて居る。其爲に邊鄙な所に居る者はどんなに本を買ふのに損をして居るか知れない。態々町へ出て小賣店で買はせれば定價プラス旅行費になる。又はそれだけの郵便賃を取られる。現在のやうな圓本流行の刺戟はこゝにあると思ひます。町でなければうまく買へない。村の方へ行くと圓本が一圓二十錢となる。そして雑誌と云へば平凡味の豊かなもの、本と云へば詰らない物だけで、優秀な物を選つて買はうと思つても買へない。それは要するに書籍商が此組合を作つて居るからで、此結合の爲に消費者が一時的ながら經濟上の弱者となつて居る。是は一つの例に過ぎないが、此以外にも澤山組合を作つては相手を困らして居るものであります。積極的と云ふと褒めた言葉であります。斯う云ふ結合ならば何も産業組合だけに限った譯ではない。此方が儲かると判ると、誰も今の地位を利用して其方に進んで行かうとするのであるから、銀行も商人も金貸しも結合して、世間馴れない農民とか個々の消費者と云ふ者を抑へ付けて置く組合を作るかもしれない。所が實際、産業組合が出來て、個々の消費者貯蓄者がこの制度を利用して、彼等を壓迫するのを我慢して居るのはどうか、もっと彼等も結合して、高く卸し高く売り散々我々を困らせようとはせずに、をとなしく閉口してしまつて、こちらも結合して對抗するといふことが出來ぬのはどういふ譯かと云ふと、それも亦理由があるようで

あります。

◆日本は商人が過剰◆

例へば消費組合で申しますれば、よその國の消費組合では從來の商人は組合の共同購入の爲に賣行きが止まると、直ちに自分の仕込先、元方に談判して、我々の所に賣る値段に若干の口錢を加へた價格で組合の方へ賣らなければ、我々は、全然取扱をしないと云ふ類の威嚇を以て、消費組合の利益を殺ぎ、之と對抗する方法を執るのでありますが、それが出來ない所が日本風で、一口に申しますと日本は商人が多過ぎるのであります。餘り多い爲に幾ら組合を作つたつて對抗運動が成立たない。仲間と申合せを破つて抜け賣をしたがる。如何なる澤山の違約者を出さうが、時に依ると村八分と云ふやうな制裁を加へやうが、違犯の全部は發覺しやしないから、偶に發覺して制裁を蒙つても構わぬから仲間を出し抜いて自分たちばかり助からうとします。即ち彼等の競争が餘りにも痛切であつた。其中でも東京に住んで居ります我々の一番問題にするのは米屋酒屋である。酒屋などは四十軒の通帳を持つて居れば宜いと云ふ。米屋の如きは市場の中の研究をした人の話を聞きますと、二十軒の御得意があれば生計が出來ると云ふことである。必ずしも彼等許りではないが、要するに人口が多過ぎて労力が餘つても、新規な生産業は探してみてもない、失業問題が起る、そして色々試みた末に樂なブローカーや小賣商人となる、斯くして商人が多過ぎてお客の方が強者となるべき理由がそこに現れて來る。唯お客様の結合力がまだ弱い爲に、一般にはさう云う不信用を抱いて居るに拘らず、廣告とか其他の方法を以て今迄はお客の群を二つにも三つにも離間することが出來て、本當に十分な判別力を發揮して居らぬのであります。併し自然の傾向を追ふならば、行く行くは産業組合の相手方はもつと弱くなる筈である。即ち組合の競争力と云ふものは今よりも強くつても宜い

のであります。斯う云ふ好形势下に於て仕事をして居る組合ですから、實はもつと進んでも宜しいのです。私が積極的と云ふ言葉を使ひましたのは、實は必ずしも敬服で無い。そんな仕事ならば産業組合と云ふやうな法律を作る迄もなく、人間が目先が利くやうになれば、棄て、置いても自然にやつてのけられる。それが尻押しがあつた爲に普通より短い期間に、普通より餘計の成績を挙げたと云ふだけのことでですから實は餘り自慢にならない。

2. 産業組合の原理的考察

◆産業組合の隆盛は競争主義の結果◆

私が皆さんに一つ考へて戴きたいと思ひますのは寧ろ是から先の問題である。現在の如き状態では産業組合の隆盛は要するに組合精神と相兩立せぬ所謂競争生活ではあるまいか、相手の小商人金貸し、小さな工場主と云ふやうなものと、走り較べの生活ではないか。殊に相手方の競争力が弱く、小商人でいふなら仲間の足並みが亂れ結合が困難で居る際に、自分の方ばかり有利に結合して、是だけの成功を収めたと云ふことは、例へば労働階級の人數が多くつて智慮が足りなくなつて、賃銀條件の申合せが困難であるに乗じて色々として仲間の競争をさせ、その混亂を奇貨として企業家が自分の安寧を擁護して、お前が來なければ明日は朝鮮人を呼ぶが宜しいかと云ふ風に、相手方の足並みの揃はないのを利用すると云ふ點から見ますれば、今日迄の經濟組織、即ち力強き者が力弱き者を壓迫して、自由市場を引廻して歩くと云ふ舊制度から、まだ一步も踏み出して居らぬことになるのではありますまいか。日本近世の一革新の如く唱へられ居つた産業組合の成功が、實は我々の社會を今日の狀態に持つて來た舊經濟から一步も前に踏み出して居らぬ所の競争生活ぢやないか、是等は宿題としてよくお考えを願ひたい。全體日本では此點が最初から力説してなかつた

やうに思ひます。

◆「産業組合」の名称は不適切／經濟組合・勞作組合・生活組合を検討◆

人は昔から餘り此點に力を入れませぬが、元來組合と云ふ言葉には別に新しい社會的事業といふ意味はない。現に今日は組合と云ふ語は何にでも使はれて居る。金貸しが集つて擔保物價格の六分以上は貸すまいぢやないかと云ふやうな申合せをしても組合である。個人の專横が悪いとならば組合結合の力を以て相手を困らすやうにするのもやはり感心せぬことである。ところが産業組合だけは別のものと始めから考へられて居つた、是だけは別種の組合だと云ふことになつて居つた。即ち金貸しの聯合や肥料商の聯合とは最初から別の物のやうに考へられて居つた。それが何故かといふ點が、まるきりとは云へませんが日本ではそう力説せられてはいない。何故他の組合に對しては租税其他の關係上普通の營利會社と同じにして居るのに、産業組合だけは特別に免税制度があり、又官廳が自ら手を下して、公益法人同様の取扱ひをして居るかと云ふことに付ては、考へる餘地があつてまだ考へられなかつたのであります。外国では此點から、所謂産業組合のみは出来るだけ別の言葉を使はうとしております。日本語に譯さうすると「組合」になりまするが、元の語は別であります。それで之を最初農商務省で作らうとした時にも考へた。經濟組合と云ふやうな名も考へられて居つた。それから勞作組合又は、生活組合と云ふ類の何か特別の字を使はうぢやないかと言つて色々苦心した跡があります。匿名組合とかパートナシップと云ふのとは全然別な文字、コーオペレーションと云ふ名を多くの國では使つて居る。即ち一緒に働く又は、共稼ぎと云ふ語である。之を日本に移して結局産業組合となりますが、此名前に決する迄に、是だけは違つたものだと感ぜしめる名前を作らうとして色々考へた跡があるのです。獨逸で使ふゲヴ

エルノッセンシャフトを産業組合と譯したのも或は無理だつたかも知れません。此語には種々用法がありますが、爰では各自の生計即ち働いて食ふと云ふ風な字である。その心持は知つて居るがなんと譯して宜いか判らないので、あやふやな産業組合と云ふ語を作つた。もう今から直しては變なものになるが、實は不正確なのであります。蠶業組合と間違つたり三業組合と云ふものとまちがへられたりする滑稽がありますが、強ひて此字を使ひました理由はあるのであります。何か他の組合と差別あるものにしなければならぬ。一言でいへば此組合ばかりは生活の背水の陣なのであります。是より他に方法のないと云ふ人々が行詰まつて立返つて来るやうな気持ちがある。單に背水の陣と云ふだけでなく、よくよく所謂自由競争の壓迫に懲りて之をどうにかして局面展開したいと云ふ所から來て居るのですから、始めて所謂産業組合を始めた連中の自信、單に相手方の競争壓迫に對して反抗して行かうと云ふだけでなく、何とかして此の世の中から日本の經濟生活から、競争と云ふものをなくさせたいと云ふ考が基礎であります。

◆産業組合＝コーオペレーション、それは自由競争の否認◆

そんなことを云ひ乍ら實際は随分相手と盛んに喧嘩はして居りますが、理論としては少く共自由競争の否認であつた。英吉利あたりの古い經濟學の自由競争主義と云ふものに對する一つの反抗運動であります。決して自由競争の上に立つて居る所の一便法ぢやない。即ちコーオペレーションと云ふ言葉はコンペチションに對立して居る言葉である。日本の經濟學の先生などに唯一無二と考へられたアダム・スミス一派經濟原論を刪定し自由競争には害があるから、出來だけ全世界を通じて之をやめさせようと云ふ気持ちから出來て居つたのであります。是は決して日本の先輩が知らなかつたと云ふ譯ではない。最初私どもは此點を非常に力を入れて説

いた譯であります。併し現在の實状をみるとやれ競争が成功した相手方を押し付けて勝つた、組合が出来ない前と較べて是だけこつちの方がうまいことをして居ると云ふやうに、言はゞ産業組合が今尚積極的の事業、即ち競争の武器に使はれると云ふことは、恐らくは此本來の精神、最初其名を産業組合と付けようか經濟組合と名付けようかと云つてまごついたやうな心持が消えてしまつた結果であります。

◆理想論と経営重視—理想と現実の間◆

私は保守論をするのではない。唯産業組合と名を付けました理由は、今尚名前の手を感ずる程特殊のものであつたと云ふことを申し上げたいのであります。従つて最初産業組合人は一種の夢見る人でありました。一種の理想家空想家であつた故に、永い間には度々落伍者が出来る位の難事業であつたけれど、此事業を進めて行けば何時かは此世の中に我々を苦しめた惡魔の如き自由競争と云ふものがなくなる。自由競争は一種の駆け比べであるが、中學に入つて立派な體格をした者ばかりが集まつてこそ面白い快活な自由競争にもなるが、いざりの子供跋の子供を連れて來て競争さしたり、年齢の違つた七つや八つの女の子と、十七八の男とを競争させたのではそれは一方を苦しめる計畫になる。そんなものを制止して組合で世の中を治めて行かう、さう云ふ考で進んで來たのが産業組合で、難事業は話にならぬ難事業であつたが、將來に明るい光りを見かけて、新たな道に進んで行くのだと云ふやうな樂みを以て、強い者必ずしも勝たず、弱い者必ずしも負けないと云ふ革新、斯う云ふ方法さへ付ければお互助け合つて生きて行かれると云ふ、一種宗教みたやうな考を以て居つたのであります。今日の貴君方と雖もそんな馬鹿なと云つてそれを輕蔑なさることはないだらうと思ふ。それはもう當り前の正しい議論で、そこに行かなければ人生の眞正の味ひはないと云はれるであらうと思ひますが、実は多

くの實務家はあまりそんなことを考へては居られない、さう云ふことを考へて居つては帳面がお留守になる、それは成程結構な教へかもしれないが、それは經營とは關係のないことである。組合を成功させる爲にはそんな説法はして居られない。寧ろ現在持つて居る所の優秀なる地位、若くは社會の同情又は官廳の援助と云ふやうな、あるだけの材料を利用して、今迄に養はれた大きな力を貯へて置くやうにして、私が理事に任命させられた時よりは、罷める時には是だけ盛んになったと云ふやうなことを云つて引込み得たら嬉しいと云ふので、さう云ふ理想論は棚に上げて置かれるのも仕様がないのであります。

◆産業組合原理・理想に苦悶する◆

組合は決して宗教ではない、浄土宗門徒宗のやうに説法をして居ても、今日の生活がうまくも辛くもならないから、それはそれとしてだゝ大切に仕舞ひ込んで仕方がないのであるが、少く共組合が共同して一つの聯合會を作り、一つの中央會を作り、又斯うして一年に一回か二回か集つて、修養の會を催される場合には、少なくとも誰か此中から此原理を考究して見ようと云ふ者を作つて置かなければならぬ。自分は忙しいが誰か團體の中で根本問題を研究する人を作ると云ふことを考へなければならぬ。是はどうしても組合でなければならぬ。一人が何も彼もやると云ふことはできないが、兎に角宣傳は宣傳係がやつて行くやうに、考究係理想係夢見係と云ふ者を作つて知らない者に説くだけのことはしなければならぬ。産業組合が全體何故に此世の中から重んぜられて居るかと云ふことを考へるならば、誰か前途に幻しを見て居る人がなければならぬ。其幻しと現實との間に開きがあれば、必ず苦悶係とも云ふべき者を作つて置かなければならぬ。

産業組合の問題には限りませんが、現在の日本と云ふ國は如何にも幻しが少い、空想と云ふ

ものが少い。従つて苦悶と云ふものが少ない國だと評せられて居る。生活苦と云ふものは本當に貧乏になるか、人が互に喧嘩して居ると忽ちに生活苦悶と云ふが、平凡な靜かな生活をして居る間は、どうも今の儘の生活、先の見えない生活と云ふものに付ての、不安が足りないのではないかと思ふ。成人はそんなものがあつても仕方がない、無い方が結構だと申しますが、私共は是を非常に淋しく感じます。なくてはならないものが欠けて居る氣持が致します。覺めたる人とよく申しますが、熱が消えると何もかもなくなってしまう。年をとつた人はよく經驗するが、こんなことで一生を費して來たかと云ふ心持、自分でもつまらなかつたといふ感情が始終恐ろしく人生を空虚にする。又今一つは多勢の者が寄り集まれば随分大きなことが出来ることは、獨り産業組合許りではない、色々の上に經驗して置き乍ら、之を大きくして見ようと云ふ考も無く、自分から小さいものにしてあきらめて居る。是等は空想などと云ふものはいらぬ、空想は寧ろ人生に有害だと云ふやうな中途半端な悟りから來て居るのであります。

◆産業組合の發展の末はどうなるか◆

哲學論は私には判らないが、少なく共今日位迄の程度に産業組合と云ふものが發達いたしますと、どうしても茲にさう云ふ問題にぶつからなければならぬ。丁度人間が大人になって來ると、初めて人生とは何ぞや、人は何の爲に生まれたかと云ふやうな問題を考へずには居られないのと同じやうに、全體の問題を考へて見なければならぬことになる。それを一つ一つの組合に委ねることはできないけれども、組合の集合體では自分等の間に、さう云うものを醸して行く必要があると思ふ。是は非常に難かしい問題でありまして之を議論しますと、話がし切れなくなります。お互いの一生位の間はなるほど現在の儘の産業組合でも進んで行けるのですが、もし若い卒直な人が、全體此産業組

合と云ふものは末にどうなつて行くのか、日本國中の者がすっかり産業組合員になつてしまふのが宜いか、或點まで行つて罷めたのが宜いかと云ふやうなことを問はれた時には、産業組合の先覺を以て自ら任じて居る人でも、此無邪氣な質問に出合ふと殆ど答へ様がない。そう云ふ時に限度と云ふものはない、何時迄も何時迄も恐らくは前に進んで行くだらうと云ふことは一つの答であるけれども、果して只今の組合運動でさういふ状態まで到達し得るかどう、この産業組合を社會化してしまつて、全國七千萬人の日本人を悉く産業組合員にするといふ所迄行けるかどうか、はた又千萬人位の者が組合の恩恵を受ければ、跡の者は受けない方が組合の爲に宜いのだと云ふことになりはせぬか。そこが問題である。非常に結構なものであるなら世界中一人残らず組合員にしてしまひ得るかどう。全世界が組合に入つて今までのやうに目に見えた利益が得られるかどうか。其答が今迄は答へられなかつた。答へられないと云ふよりも、もう少し遠慮のない所を申しますと、或所迄擴張すると寧ろ満員と云ふ札を掛けて濟まして置きたい時代が來るのぢやないか。恩恵を受けた少數の人間が非常に幸福になって、あとの者は閉め出されることになりはせぬかどうか。是は實際問題としては遠からず來やしないかと考える。取越苦勞だと云へばそれ迄だが、私は此處で若し出来るならば、全國の人が産業組合員になつてしまつた場合の經濟状態と云ふものを考へて置かんければならぬと思つて居ります。今日の經濟學と云ふものは純理に二つなしと云つて居りながら實は個々の人間の能力と判斷とを極端に承認することの所謂自由主義を根底とした經濟學でありました、従つてその競争の極弊が強き者の喜びになると同時に弱い者の悲しみであると云ふことをどん底迄經驗した人々が、假令之を撲滅することが出来ない迄も、少なくとも之に對して制限を設けなければ人生を

送ることが出来ないといふ考から設けられた産業組合であるならば、永く今日の經濟學の通説を認めて居られる筈がないのであります。即ち苟くも産業組合を以て私利私欲の戰術とせず、公共事業として國家も亦之を尻押しすべきものであると申します以上は、此恩恵が同胞の全體を此主義に化し得た場合の經濟組織がどんなものであるかを、説明することが出来ぬやうでは或はかの所謂矛と盾との兩方を賣りに歩いて、この矛には如何なる盾も敗れざるなしと云ひ、又此盾は如何なる矛も傷け得ないと云つたといふ昔話と同じやうにどつちが本當だと云はれたら一言もないと云ふことになると思います。

◆産業組合の効果達成はその不要へ◆

具體的の例を申上げて見ますと、信用組合の今日のやうな理論などは、あれは甚だ中途半端なものでないかどうか。即ち此信用組合と云ふものが最も完全に其効果を治めた場合は、即ち信用組合の不要になるときではないかと思ひます。皆が貯蓄してしまふと貯蓄の金が始末に困る。今不心得の人間が多くて矢鱈に貸せ貸せと云つて借りたい人間が多いが、國內が悉く金に困らなくなつて、信用組合の方針が徹底して全部が此組合に加入し、それぞれ相應の貯蓄が出来るやうになつてしまつたらどうするか、餘程おかしい問題になる譯であります。皆或は溜まつて困ると云ふ昔話のやうになるのではないか、幸にして現在はそんな心配はない、日本で要らないなら外國に借りたい所がある南米にも貸してやり、印度にも貸してやるが宜いぢやないかと云つても、其世界の全部の者が残らず信用組合主義に同化されてしまつたらならばどうなるか。是は餘程面倒な問題で、今のままでは信用組合は單に此世にまだ不心得な人がある故に榮えて居るといふことになるのです。だからして私たちの考へる所では獨り境遇が公平なる批判を許すのみならず、自分自身の將來の計畫としても、資本に關する經濟原理をもつと徹底

的に研究して置かなければならぬものは、大資本家又は其雇人たちでなく、従来最も資本とは縁のない人間、自己存立の爲に是非なく信用組合を作つて其需要を充さうとする人々でなければならぬと思ふが、悪口を云つては濟まぬけれども、現在の信用組合は多くは素人料理が料理屋を開店したやうな姿でありまして、いつも自分等が氣に喰はぬからこそ排斥し絶縁した所の在來の金融機關の眞似をして暮らして居る有様である。そんな内股膏藥式の組合が將來矢鱈に發達して行つては困る、さう繁榮してくれぬことを國民が希望する時代が來るかも知れぬ。是はどうしても考へて見なければならぬ問題だと思ひます。

組合が繁榮すればするだけ必ず此の實際問題は大きくなります。即ち銀行に弊があるやうな土地では組合にも弊がある。銀行の役員が地位を利用して餘計な仕事をする危険があると致しますと組合にも矢張り其危険がある。詰り片方は國家からの大きな期待があり、片方はいつも警戒をせられて居る金融機關であります、どこにそれだけの差別があるかと云ふことが誰にもよく判らない姿であります。此點は將來に亘つて、もう少し此日本の實例に合せて研究するやうにして貰ひたいものと思つて居ります。日本では西洋の歴史に見えて居りますやうな産業革命がみられなかつた爲に、細元手、即ち百圓とは二百圓とか云ふ資本が、まだなかなか現代の經濟社會に於て仕事を致して居ります。所が此の資本戦ほど大と小との太刀打ちの困難なものはない。百圓持つて居る者と千圓持つて居る者とは一對十の比例以上の力の差がある。其の切れ切れの小さな者が獨立して五十圓あつても商賣は出来る百圓貸して呉れても商賣は出来ると云ふやうな細元手が今のやうに獨立して世に立つて働ける時代が、果して何時迄續くかと云ふことは大きな問題であります。農業の如きは天然に制限があつて、例へば団畑で申します

ると、少し大きな面積大耕作をやらうとすると、十五人も二十人も人間から地面を借らなければならぬと云ふ譯で、到底大資本家がやつて來て競争者になつても小さい者を苦しめる餘地はないやうであります、それすらも實はもう恠しくなつた。農村の電化なんと云つて電力の供給を資本化する。直接耕作の手を出して居ないと云つても、水利の問題にしてもさうだ。例へば排水水揚の機械それよりももつと實際的のものは市場聯絡、販賣方法などでは、もう餘程大資本の壓迫の手が延びて居る。恐らく現在のやうな小さな孤立資本の利用をつゞけて永く其競争を續けて、行くことは六かしからうと思ひます。従つて共同の貯蓄は勢ひ追々に共同の利用の方に進まねばならぬのだが、其用意はまだ一向にとゝのつて居りません。

獨逸で信用組合を最初に作りました時には、非常に小農の資本が拂底して居た時ですから、之によつて大きな恩恵を受けました。それが平田伯爵などが若くて學問をして居られた時でありましたから、同様に我々の頭に印象して居りますが、あの當時まだ行届かない、一丈の建物に三尺の梯子が懸つて居つた時代であるからよかつたが、上まで梯子を懸けて了つて資本が全部に行亘ると、今度は三百圓持つて居る者と千圓持つて居る者との競争になる。千圓の者が二千圓の仲間を誘つて來て争ふと云ふことになる。少額資本の貸付を以て基礎として居る日本の信用組合と云ふものは、全國に信用組合が行亘つた上は、商人はどうすると云ふ方の心配よりも、もつと早く警戒して居らなければならぬ問題があつたのであります。ですから國柄にも依りまするが、英吉利の貯蓄組合などは早くからあつたものは目的を限定して居りました。限定せざるを得なかつたのであります。即ち、一種の生計保險お互の家計の入用な時のみに融通するやうにして居たのである、生産事業の資本ではどうせ大企業にはかなはぬから、それより

も暮らし向きの安全の方に力を入れようとしてしました。是が獨逸の信用組合と違つて居つた點である。併し金がたまつて呉れば餘つて仕方がない。だからそろそろ自分等の利益になる消費品を作らうと云ふことに進んで來たのであります。次には販賣組合なり生産組合なり、購買組合なりと關聯した問題でありますが、我々が幾ら貯蓄したい志はあつても、手から口へと云ふやうな貧しい生活をして居る者にはそれが出來ない。先づさう云ふ者に貯蓄力を興へようとしたのが消費組合であります。一帖八錢で買つて居た紙を七錢五厘で買へるやうにして其差の五厘を貯蓄しやうぢやないかと云ふ事が、労働階級の間に入つて來たのが消費組合でありました。さうして居る中に段々妙味が判つて、貯蓄組合の貯蓄力が殖えて參ります。さうすると基金はどうしやうといふ事になる。子供を賢くする爲の學校を作つたり、青年男女の集會所を作つたり、病院を造つたとかさう云ふ物を造つたがまだ餘つた貯蓄があるのでそれをどうしやうと云ふやうな結構な時代が來たのです。それを以て追々に暮らし向きに入用なものを自ら製造するところまで進んだので、もともと各種の産業組合は彼等にとつては別々の仕事の物ぢやなかつた。所が日本では信用組合は頼母子制度の思想と手を握つて發達した。農村で金を借りると云ふ興味を農村が始めて知り、返して貰つたり貸して貰つたり、貸し借りと云ふことを面白く感じ始めた時代は古いことではありません。必要であつたか不必要であつたかは斷言出來ないが、非常に金の貸借の流行した際にこの信用組合が起つたのであります。即ち日本では信用組合を少し利用し過ぎた訳であります。それは信用組合ばかりを獨立させて置くことが宜いかどうかと我々は危ぶんで居たのですが、兎に角最初は法律で他の種の組合を兼ねることを得ずと云ふことにして居つたのであります。只今では許可を得さへすれば自由に兼營し得るやうにな

つて居つても、やはり最初の氣持ちが残つて居りまして、近頃作りました信用組合もやはり他の産業組合と兄か叔父さんと云ふやうな氣持で、特別の技能のある人に經營を委ねなければならぬと云つて、地方小銀行の取締役にでもならうと云ふやうな人が理事になるらしい。その爲に私の考へて居る所に依れば、信用組合は稍々餘計に發達した、と云つてはおかしいが、少し行き過ぎた感じがする。行き過ぎて結構な場合もあるが、事に依ると今にあんなに迄助長しなくつても宜いと云ふ時が來るかも知れぬと思ふ。實際の政治問題と切り離して皆さんに御考を願いたいと思つて居ります點は、今申し上げたやうに此組合が全國に普及してしまつた暁の問題であります。

◆經濟生活全体の共同が必要◆

それから第二段としては少額資本が本當に生産上の効果を生じない時代にはどうするか組合の金を本當に生かして使ふだけの人間即ち小さな商賣でもするとか、新規に何か模様換でもしてやつて見ると云ふやうな者にはいいが、其以外に於ては此小口の金と云ふものは効果は大抵十分でないのであります。即ち或程度まではあの制度がある爲に或は余計に借りやうとする者があるかも知れぬ。ですから今後は是より今一段と進んで、貯へが澤山出來て、殊に農村に於てはそんなに金はいらぬから、借り手が無くて銀行に預けて、方々から貸して呉れ貸して呉れと云つて來るやうな時代が來るかも知れぬと思ふ。そこも今から考へて居らなければならぬ。是には少くとも金の貸し借りの信用だけの共同でなく、經濟生活全體の共同でやると云ふ氣持ちをもつと發達させなければならぬ。即ち恐らくはうつちやらかして置いたならば、此余力と云ふものが貯金となつて預金部に留まり若くは或銀行の大御得意となつて、金融界に少しでも波亂のある際にはひやひやししなければならぬことになる。是はもう少し組合全共同の上に役に

立つ所の生産事業の金に供すべきで、今からは其方面の研究をしなければならぬと思ふのであります。

3. 消費組合とその社会的効果

私の御話しやうと思ひました所は、實は此の点よりも今一足先に進んだ、消費組合の問題であつたのであります。此演題を出します時には、主として購買組合の方に付て自分の意見を云ふ積りであつたのでありますが、緒論がつひ長くなりましたが、私達の關係して居た時代が特に此點に問題があつた爲でありませうか、今以て自分の一番考へさせられて居るのは消費組合とその社会的効果といふことであります。信用組合の活動論に付ても或は、稍諸君には快くない意見であつたかと考へるのですが、購買組合の側に於きましては私は殊に一つの大きな懸念を抱いて居るのであります。即ち購買組合は購買が目的だから、組合が繁昌すると云ふことは盛んに購買することだと云ふ風な無造作な議論が起り勝ちで、殊に先程申したやうに、丁度信用組合が従前の村落金融機關を追ひのけて、其代りを占むる同種の機關であると云ふ如く、以前村々にあつた小商人を抑へ付けて、其代りに作つた小賣の機關と云ふ氣持が若し弘く普及しましたならば、世間は産業組合制度の恩恵を禮讃する前に先づ以て其危險に備へなければならぬのである。此點も亦各様の議論になりますが、共同購買を目的とする組合であるが故に、最初の法律では購買組合と云ふ名にして置いた方が宜いと云ふことであつたが、是もやはり此生計組合とか消費組合とか、消費者自身の立場から、名分を明かにして置いた方がよかつたのです。組合は法人であるから組合自身の立場から云ふならば、少しでも多くの物をお客様に売り付けて、少しでも澤山の純益を納めるのが成功と云ふ風な氣持がしやしないかと云ふことが氣遣はれるのであります。幸にして現在迄の所では、

組合の取扱商品と云ふものが各所それぞれ申合せの制限があつて、差當り入用な而も需要數量の多い、季節の短くて濟むやうな物許り選んで居りましたので、此問題は恐らくはまだ痛切に感ぜられて居ないこと、思ひますが、一方には共同購買の機關を作つて、それだけの機關を備へそれだけの資本を用意し事務所倉庫を置いてあり乍ら矢張り村には依然として昔通り種々なる店もあれば酒屋も醬油屋もあり又は二里三里を山坂を通つて町方へそれだけの品物を買ひに行くと云ふことになつたのでは實は組合の目的は達せられない。だから自然の儘にうつちやつて置くと、組合の恩恵が組合員に徹底すればする程、成るべく共同購買の物品を殖やして仲間だけで用が濟むと云ふことにしようといふのは當り前である。現在でも村落にある雜貨店と云ふ物は問題である。幸ひ小學校の周圍などにあるから一軒の家を支へるだけの利益があるかも知れぬが、普通には僅かな一部落の中の需要だけに供給する爲に、一軒の小商人と云ふ者を維持させることが困難である。だから村の人の知らない物で町に流行して居る物香水であるとか香油であるとか云ふ物を段々に入れて購買心を刺戟してみやうと云ふことになる。組合とても同じことで一つの設備を支へる爲には大體収入に最小限度がなければならぬ。作る以上は別に村にそんな雜貨店を存置して置く不利益を免れやうと云ふ點から、幾らかは購買組合の事業といふもの、區域も廣くなるものと見なければならぬ。其時に於て私がお話しやうと云ふ消費論の問題が、丁度信用組合の資本論の研究をしなければ組合員の義務が濟まないやうに、是非とも組合として改めて考へて見なければならぬことになる。

◆消費論の必要◆

日本では明治になりまして一時代「奢是吾敵論」と云ふものを井上毅氏が書いたやうな時もあつたのですが、後には簡単に勤儉とか貯蓄と

云ふことに力を入れまして、或消費が奢だとか奢でないとか云ふ議論を、教育家も経済學者も總ての人が避けるやうになつた。つまり奢とは何ぞやと云ふ問題が新しい社會で解決しにくかつた爲であります。隣家の主人には奢侈でない紅茶が、我々の家では何故奢侈となるかと云ふことを追求せられると、人間の平等の思想の上に可成り有害なものになる。互いに遠慮して私の身分ではそれは奢侈だと云つて居る間はよいが、お前の境遇でそんな物を使つてはいかぬ、お祭りの日と雖も米の飯を食つてはいかぬ、婚禮でも絹布を着けてはならないといふ筆法で昔の奢侈論を正面から論ずることは六つかしい。其癖隨分個人批評としては井戸端會議なんかでは、奢侈贅澤は始終問題になつて居るに拘わらず、お互の間では正面に此奢侈論を闘はすのは避けて居りました結果、單に奢侈論が社會問題から隠れただけなら宜いのでありますが、折角研究しかゝつて居る所の消費と云ふ問題が御留守になりました。即ち今頃になつて購買組合の関係者に向かつて消費論の革新を説かなければならぬやうになつたのであります。尤もさうではありませんでも、日本の經濟學者の書物を読んで見ますと、殆ど例外もなしに經濟の原論では生産の方面に力が入つて居ります。獨り日本許りではありません。日本の學者が手本にして居ります所の亜米利加なり英吉利獨逸あたりの經濟の書物を読みましても、總論の中には消費論と云ふ部分が非常に少ないのが普通であります。おしるしばかりの消費論に對して、生産論分配論と云ふものに澤山の頁を費して居る。是は色々理由のあることとは思ひますが、一番大きな理由は矢張り是が生活實例に基いて説明いたしませんと消費論には議論の餘地が少いから、生産論の如く生産には三つの要素があつてそれは土地勞力資本であると云ふ風な、純理論的に解釋することが出来ないといふことであらうと思ひます。兎に角理由は何だか知れません

が、日本の經濟と云ふものは徹頭徹尾今日まで生産本位の經濟學である。國の經濟が榮えるとは何であるかと云ふと、何時でも生産統計の上に現はれた所の正確でも何でも無い數量、數量だけでなく賣上金高價格の名ばかりの上り下りを念頭に置いて、其増したのが此産業の榮えた其地方の繁榮することだと云ふやうに、簡単に即斷して來たのであります。どんなに地方に於て生産高が殖えた所が一人が取つて了つたのでは何にもならぬ。然るに各地方に於て産する所の全體の物品が、果して其地方の生活の幸福になつて居るかどうかと云ふことが一つも眼中に置いていない。僅かの間に日本の經濟は發達いたしましたが爲に、殊に斯う云ふことに付て人の注意力が片寄つてしまつたのであります。物は作ると云ふ以上は賣らなければならぬ。賣ると云ふ以上は餘計賣れるやうにしなければならぬと云ふ氣持が段々伸びて行つて、現在に於て農業者が自分の家庭の用途に供して居る農産物でも事實上の収入でもない所の評價したる金高に依つて之を算定して一喜一憂して居ると云ふ譯であります。生産物の販賣と云ふことに付ては全國が關心して居るに拘らず、何人も未だその消費の適切と不適切とを考へて居るものはない。今からもう三四年にもなませうが、醫者の仲間から全體日本人は不必要に肉を食ひ過ぎて居る、祿に嘔みもしないで肉をいき呑みにして居る、もう少し娘子供にも食はし年寄にも食はせれば宜い、全體に日本の人が牛肉屋へ一人で行つてどつさり食ひ、家の他の者には食はせずに置くのはよくないと云つて論じたことがあるが、我々の眼から見ればこれは純然たる經濟問題を醫者に卷上げられたのであります。其問題も今は全く消えて了つて居る。一軒の家だけだとそれは大して影響しないが、それが集ると一國の消費の傾向を變へて行くことは何を見ても判ることでありまして、殊に中央文化と名付くべきものが地方を風靡する力は非常に強い

もので、大體日本國民の幸福の多少を東京銀座の街頭に於ける近代式青年、所謂摩登ボーイのやつて居る生活から割出して、あゝ云ふことをするのが文化人と云つた風の氣持が都會のみならず、段段に大きな半径を畫いて地方に入る、それも自然の順序で少しも無理な所はないのでありますが、その地方には今までまだ新しい人間の新しい生活とはこんなものだ云ふ標準がないから、悲しいかな、それが其地方の生活標準の基礎になつて居る。商人等は購買力と稱して苟も消費者に能力のある限りは其能力の全部を買物に出し盡さしめようと云ふ立場から營業して居る。飛んでもない馬鹿な話であつて、我々の購買力を目算にとつて物を賣り付けられて堪るものではない。ところが現在は一國の經濟政策と云ふものは生産政策であります。生産から出發してそれを國內で販賣することを目的にして居るものが今の經濟政策であります。其爲に消費者の側では何時でも自分の購買力を物指を入れて計られて居る。一旦地方好景氣といふ噂が傳はるや、何とも彼とも譯の判らない賣り物が宣傳せられてやつて来る。一番最初にやつて来るのが活動寫眞、浪花節、然らずんばいか物の書畫骨董それから反物化粧品、どちらかと云ふと流行には抵抗力の弱い人間の判斷より以外に取檢の決定の法則が無かつたのです。

◆消費組合の任務—適正で賢明な消費◆

此際に當つて茲に消費を共同にしようぢやないかと云ふ産業組合が出来て、しかも其組合が矢張り我々の購買力を當てにする所の小賣商人と同じ心掛を以て進んで来るのが常態でありましたならば、恐らくは我々が産業組合第一の恩恵なりと見て居る所の生活の餘裕は何時になつても得られまいと思います。少くも消費組合と云ふもの、一番大きい任務は、單に消費を有利にさせると云ふだけでなく、適當なる消費正しい消費若くは賢明なる消費とは何ぞやと云ふことを明かにすることにあります。組合は決して

賣らんとする側、購買力を誅求する側の代表者ではない。消費者と云ふ者を代表した團體であります以上は、是非共何を如何に消費するのが賢明かと云ふことに付て組合の指導力が働かなければならぬ。然るに此物と此物と二つあるがどちらが廉くて宜いと云ふ比較は出來ますが、是は君は買はなくても宜い、是はお前の家では使はんでも宜いぢやないかと云ふことになる、丁度信用組合で申しますれば、今年は君の家では借りない方が宜いとか、今年は貯蓄しない方が宜いと云ふのと同じことになるのであつて、或は自らの力を弱くするやうに考へる者を生じ共同購買の事業が出來ますと、勢ひ何か買はせなければならぬといふ誘惑があります。所が現在の日本の消費方法には、果して是がなければならぬものと、なくつても濟むと云ふもの、境が賢明に判別せられて居るかどうか判らない。それを今一々議論することは困難であります、二三年前に私が九州を旅行して居る時分に、一番深く考へさせられたのは酒であります。海岸地方の青年會が閑な時に酒を賣る、是が青年會の共同販賣事業になつて居る。是は大分宮崎縣邊りであります、非常に時間を制限いたしまして、六時から九時迄とか八時半迄とか販賣時間を制限して居る。一軒の家には三合迄しか賣らないといふ制限を付けて居る所もある。が一般は矢張り青年會の事業としてやつて居る以上は、成績が擧がらぬと云つちや困ると云ふやうな氣持があります爲に、青年自身も飲み出すとか親達に飲むのを奨めるとか云ふ懸念もあります。酒以外のものもさうであります。我々に必要缺くべからざる、是だけの物は缺いてはならぬと云ふ帽子とか靴とか云ふ物でも、成程外部から見れば是はお前の身分にとつては贅澤だと云つて、身分を云々せられたら氣持は悪くなりますが、實は日本の現在の經濟狀態に於て、果して今日だけの物を消費し得るかどうかと云ふ能力の問題は未決であつたのでありま

す。是は厄介な大きな問題で、恐らくは今後段々と所謂諸君の中の考究係の方が考究して下さると思ひますが、外國では實は此問題を考ふべく余りに人が個人的になつて居るのですから、あの人は金があるから贅澤するのだと云ふ所まで徹底して居りますが、我々の方では隣でやる以上は自分もやるか、然らずんば悪口を居ふかどつちかである。いはゞ日本位共に消費問題を考究し得る社會はないのである。今一つの點は日本が島である。是が支那のやうに大陸續きでありますと面倒ですが、此消費問題を日本では考へざるを得ないのである。私共が消費問題をどうしても考へなければならぬと最初に心付いたのは沖縄縣であります。此處では島の中で作る品物と、島の中で費す品物がよくわかるのです。内地から持つて行く物は一所からしか、陸上しないから、出る物が幾ら入る物が幾らと云ふことが判る。そして島の天然の許す限りに於て、島の人間の働き得る限りに於て全力を盡して作り上げた總數量よりも、外から持込む所の全體の價格の方が何時でも多い。自給自足と云つた所がどんな山の中に入つても、外から物を買はんでも済ますと云ふ土地は滅多にない。然るに今や日本の國も全體で作つて居る生産物よりも日本全體で消費して居る物の方が多い。我々の教科書の外國貿易の原理と云ふものでは、少し長い間輸入超過が續くと忽ちにして逆轉して輸出超過になる、又其次には反對になると云ふやうに本にはよく書いてある。併し實際は中々本にある通りで無かつた。小さい所で調べたらよく判る。其土地で生産する力の全部の物を舉げて買切れない物を消費して居るとすればそれは無理をして居るのである。百人の島に百石のコメがとれるとすると、一石ぢや足らなくて一石二斗食つて居る人があるなら、誰か八斗以下で我慢して居る人があるに相違ない。一つの限られた土地の中の生産が、假りに外國からそれに相當するだけの物を取つて消費して居

る場合でも、尚ほ時と場合に依つては殿様であるとか地主とか金持とかゞ一人前半とか二人前とかを取り、残りの者は七分とか五分とかで我慢して居なければならぬ。それでは弱い身分の消費が不完全は明白である。所が之を當り前だとしてさうださうだと云つた者が二つある。其一つは純然たる自由主義の經濟の議論がそれであつた。所謂私有財産制度が之を認めて居る。財産とは何ぞや、自分で勝手に處分し得るものではないが、我物を我が浪費するのは何の不可があるといふ。それにさうださうだと云つて賛成したのは詰り消費機關である。日本では生産事業が發達せぬと云ひ乍ら、會社を作ると殆ど大部分が所謂消費事業である。多くのものは人をして金を消費させようとする手段を以て企業として居る。是は何も差支えないやうであります、全体の缺乏して居る生産力を減らす意味に於て無理が出る。

問題が複雑になりますから食物だけで簡単に話をして見たいのでありますが、今日迄の人口と米麥の生産を較べて見ますと本當に足りたことはない、やつと一杯と云ふ所で蓄まつて、人口が少し増して來ると引きずられて生産も少し増して來るさうして今日迄來て居るのである。今日の米麥の國內生産高と外國輸入を加へるとやつと一杯である。是よりもう一杯宛て余計食はうとすればもう足りない。其時にもつと美味多量の飯を喰はうとする者が若干出る、さうして他を我慢させる。是が永の間の政治の基礎になつて居るのであります。其中には俺は全體の政治を掌る領主と云ふ者であるから、領主はもう少し立派な所に住んで、立派な着物を着て威張らなければならぬ。又俺は領主の家來の家老であるから俺も立派な服裝をしなければならぬ、家來を五人連れなければならぬと云ふ譯で、又世間の人もあの人には余計やらんければならぬと云つて我慢した。全體を百で割つて百分の一宛取ると云ふ譯に行かない。あそこには

百分の十五やらんければならぬから、我々は百分の〇.六で我慢しようと云ふのが今日迄の政治で、それで抑へ付けて行つた間はよかつたが、現在では仲々それではいかぬ。そんなに一人許りにうまいことをさせてはいかぬ、俺にもさせるさせると云ふ要求が出て来る。そこで私の云ふ奢侈であるが、言葉は悪いが、生産力に比例せざる消費と云ふ定義を下せば、今日は正しく奢侈消費で、現在の所では無差別と云ふよりは、無理に余分の物を入れて目をつぶつて消費して居る。日本が亜米利加の隣に居ると云ふこと即ち海を隔て、隣だと云ふことは迷惑な話で、生産力の側から申すと丁度端と端であります、こちらの方では重箱の隅をはじくるやうに屋敷の隅迄も果實を植える位のこまごました注意を以て一軒の収入を補足して居るのに、其隣には土地を澤山持った、金も澤山持った、そして人間の割合に天然の餘裕の澤山あるアメリカそれにかぶれることは善悪の問題よりも利害の問題であります。歐羅巴では大西洋が太平洋よりもずっと狭いから、アメリカの影響を誠にひどく受けるが、戦争後は歐羅巴人はいゝ癖がついた。牛肉の如きもホテルでも料理屋でも家庭でもごく小さいものを用ゐる。御馳走に呼ばれても二皿とソップとお菓子和云ふ食事に決つて居る。所が亜米利加人が大きな胃袋を以てやつて来ますと足らないのでもう少し食はせると云ふ。亜米利加を旅行した人は驚いて居る。ビフテキなどは一斤で一皿の非常に大きな物、それを一家四人位で一皿食ふ時は宜いが一人の時は困る、食ひ放題に食つて了ふと云ふやうなものが彼等の隣人であるので、佛蘭西人は困つて居るが、英國も困つて居る。所が之を日本の者は世界の新しい文化としてその米國風をどんどん入れる。あれは世界の新しい文化ではないのです。世界の中の或る特殊の國、太平洋岸の新開地の文化である。然るにそれを真似るのが人間の幸福であることにきめてしまつて、どこに

行つても生活幸福の標準をそこにしかとらないと云ふことは非常に誤つたことでありまして、而して、其米國と雖も全國が決してさうではないのであつて、旅人のよく行く盛り場にさう云ふ生活があると云ふだけで、其以外には日本で云ふと京都みたやうな地味な生活が幾らでもある。

◆消費組合は消費を少なくする組合◆

日本の今日位都市の消費機關が発達して居る時代はない。何かと云ふと人が小賣店を始める。そしてどうにか斯うにか立行かうとするのでありますから我々は可成り馬鹿にされて居るのである。その判別を自ら棄て、今日迄我等は經濟上の弱者であると云ふやうなことを云つて居た。自分等の力が本當に判つて来るならば、各産業組合に於ては行く行く生活に付て豫想以外の大きな成績を擧げるべきわけである。況や此日常のわかりきつた問題に付て斯う云ふ單純な考へ方をして敗けて居ると云ふことはないのである。我々が無關心のために空な嗜好に投ずる品物は随分入つて居る。之を人間の身内だから棄て、置けば宜いと云ふことはいへない。其人だけは我を通させるとしても、さう云う氣風は何時までも残つて困る。是は當然消費者自身が考へなければならぬ。自分の常識に出發した消費判斷をしなければならぬ。是非必要な物でも自分の力がなければやめなければならぬ。地方地方に於ては是だけの生産力しかないから以上の消費をするのはいけないと云ふ考へがなければいかぬ。

我々組合外の人は何とかして組合が今よりも一歩榮えるやうにと祈つて居るが、組合の仕事は或る程度の理想に限つて其先はやらない。組合の年々の成績をよくしなければならぬとか、小賣商人の代りになつたのだとか云ふ氣持ちがある間は矢張り駄目である。だから我々の意見が容れられると、消費組合は消費を少くする組合であるかも知れない。購買高を少くする

ものであるかも知れない。それで宜いと思う。
もう既に今日でも幾分行詰りになつて居るのであるから、進んで此方面に出て行かなければならぬ。今日お集まりの方には深い経験を持つて居る方も多く、一方には又若い方もあるやうでありますのでどうぞ十分御懇談の上で將來根本的此方面の御研究が願はしいのであります。

(完)